

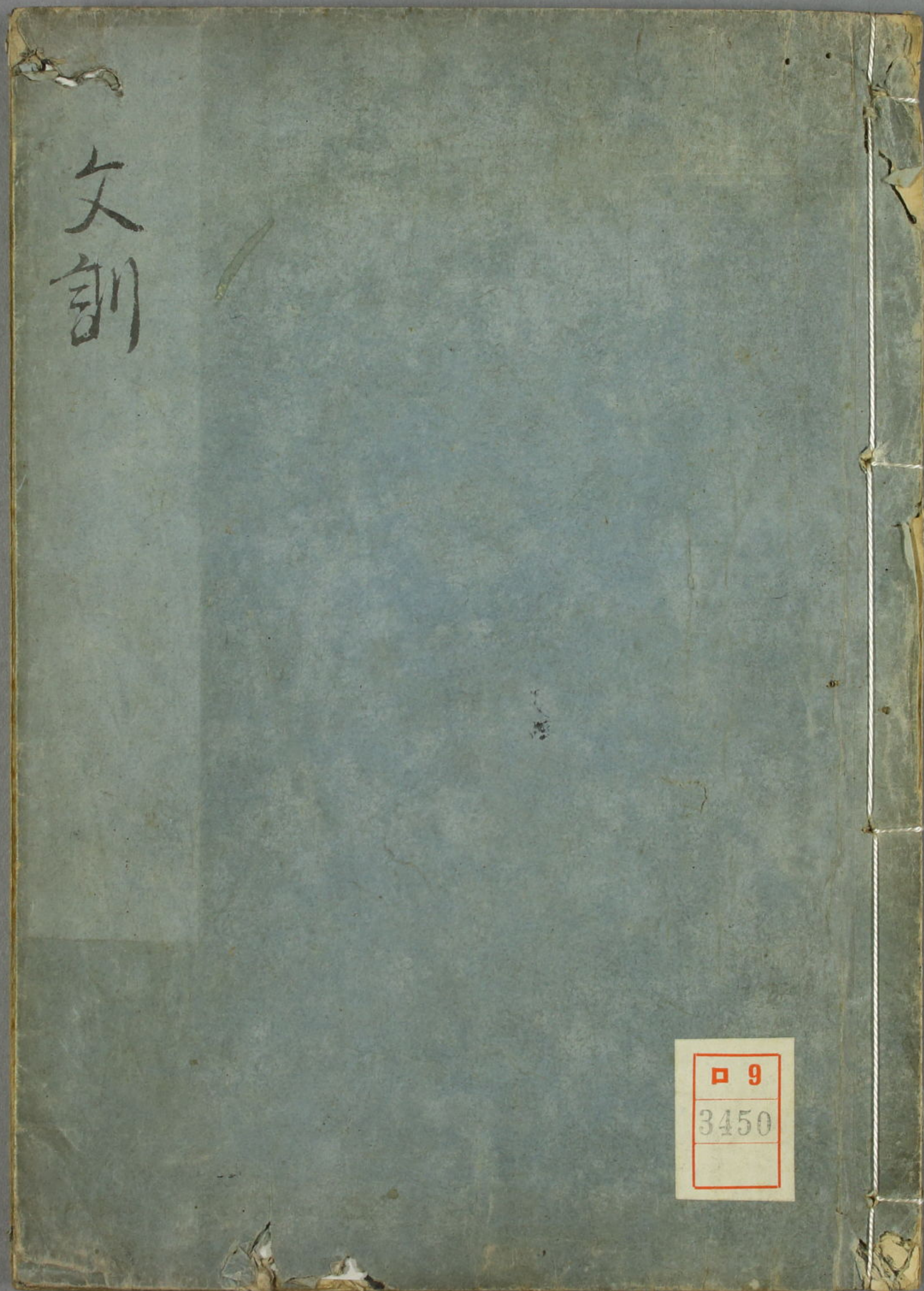
文訓

9
3450





文述訓
全



文述訓

9
3450



Handwritten text on the right edge of the page, possibly a date or reference number.

Handwritten text, possibly a name or title, located in the upper right quadrant.

Handwritten text, possibly a name or title, located in the middle right quadrant.

Handwritten text, possibly a name or title, located in the lower right quadrant.

Handwritten text, possibly a name or title, located in the lower right quadrant.

Handwritten text, possibly a name or title, located in the lower right quadrant.

Handwritten text, possibly a name or title, located in the lower right quadrant.

Handwritten text, possibly a name or title, located in the lower right quadrant.

Handwritten text, possibly a name or title, located in the lower right quadrant.

Handwritten text, possibly a name or title, located in the lower right quadrant.

Large blank area on the left page, possibly a redacted section or a page with very faint handwriting.

口 9
3450

門 口 9
號 3450
卷

文訓



貝原篤信著

士農工商乃上子居く民をたさむる位あれば一心を以
 弟事に通せまんいあえくは故平古人字號作るや
 士の字下には必し上子に必し一心なり十、教此極なり
 弟事万物をすていしるるれ、農工商乃一事一統を
 如いりていあむの用いりかひも故よ本を先ふし、志を
 後か、先後の次第なり、志をさして廣く事をまよひ
 知え、傳書字問はる、本をほくむるなり、莊術を
 学ふ、未もまも多也、多くは弟事の本幹立く枝葉
 志あむるなり、本と本と、未を未と、本未と、杯

倭も之——学問の四書六經を考へて——史学も伝子も
及少角——藝術の六藝文武の法を學ぶ也——六藝の
貴賤も少角下は——くふる日用の事也中につま
細り禮を早くたふぬ——禮をたふされぬの事
法はふふらび——人道とて古禮は唐の古書もふ
多國——も今用ひて——又直——か
さるるも多——考へて用捨を——小兒の附
父母も之を見を教ひ孝道を教ふし君を尊ぶし
け之の賓客朋友も文も——飲食言語五長言も
乃法もまづ學ぶ——む——中まつて飲食の禮は
む——禮の飲食は——まると古人の——飲食ありぬ

もはむさぶり——每後なれじや——念て人間乃法もわが
禽獸より似たり——今世子傳も。和礼は且利氏の附も
まじりも——ふ家も——國土の宜しきも古禮りもむさぶ
事多——小兒の輩も——其要用を法も——次少書
状をたふす禮法あり——年所りや——長せは是と習ふ
——是亦日用の要事なり——跡も——書禮を
たふされば法もありむしき事——多——音樂は古り
ゆも——朝廷り傳りて——危人の事もある成り——
俗樂も淫聲もわがも人の忠孝義理の道も——
たし風雅なる詞を以法りて歌章とて——小兒の附
習ふぬのとお——えとなり義理をたむ——今

俗樂の章歌、教とあるは又、ちんと柏子のいそり
きとんをさかじ、多しり、害あり、馬ハ、いそり、我
國の要し、教あり、知り、学あり、書法ハ、わ
や、まの、古、筆と、学あり、能書と、学あり、れ、書、学
ま、ま、び、風、體よ、記、書と、学あり、れ、書、一、風、體お
あ、れ、書、法、ま、り、も、近、世、國、俗、の、書、に、風、と、習、を
ま、筆、一、物、あり、本、邦、の、書、を、古、く、唐、の、人、を
お、の、り、只、ま、風、體、ま、中、華、子、及、ま、凡、多、筆、の、筆
法、一、く、志、り、ま、ん、や、ま、記、を、一、ま、用、あ、り、ま、な
と、よ、み、く、多、れ、ハ、巧、ま、れ、ま、用、ひ、ま、り、ま、み、ま、を
記、書、一、筆、一、け、ま、い、本、法、り、ま、か、ま、り、國、字、ハ、別、ま、り、

國の法、り、な、り、ま、一、志、字、ハ、わ、り、ま、り、此、書、或、学、よ
一、日本、流、の、志、字、唐、流、の、修、字、一、つ、ま、り、ま、り、ま、り、
ま、也、中、華、此、書、ハ、淳、化、法、帖、王、羲、之、一、下、法、各、ま、り、
法、帖、一、法、年、一、一、書、り、ま、り、通、ま、れ、れ、法、ま、り、ま、
あ、ひ、ま、り、一、筆、法、ハ、日、用、り、切、用、た、り、ま、り、記、ま、り、ま、
必、ま、り、一、一、國、の、風、俗、ま、り、ま、り、位、の、人、ハ、筆、を、ま、り、
い、ま、り、古、の、法、り、あ、り、ま、り、大、谷、ま、り、ま、り、ま、り、
賤、ま、り、人、り、記、文、筆、法、を、ま、り、ま、り、一、有、り、ま、り、
士、卒、の、教、領、内、の、民、教、玉、那、の、廣、使、回、教、年、貢、書、
の、多、少、を、か、ん、一、國、家、の、用、分、を、制、一、合、限、と、ま、り、ま、り、
ま、り、一、ま、り、ま、り、一、軍、法、ま、り、ま、り、教、身、方、の

了し我々を志しし事かけぬし日本紀前集の
二書口の國上代の事と志し和借り通むる益多
志和字と志し人の先必しむし日本紀とん次り六
國史たし次り東鑑以下の歴史とんるし
學問乃要二何の道を明しふし事とんるし
道を明しふし事とんるし經學を志し經の四書五經なり
是學問の布也るし是を志しし史學を志しし史の
左傳史記漢書以下の紀史及通鑑あり經學乃
史の史より通せられし史今にふして用り是を志し
經學たし史學を偏あれを道理よるし
和記の書記のむし三のふし事なり氣強くして書と

多くよんてし方れは是なりいと多き多き妨あり
書記多し後安し是二也若く氣さるんたれど
記臆強くしておれん安し是三なりは三の事
書を傳しよし又年をけては少しを傳しよし
事とんるし一よしすも君ははるし事なり
つとらるるあり人の文より志ありたりとあり
又和記の書記のむし事あり二五ハ
和記の事かけぬし事とんるし
多くよむる事とんるし後、
つとらるるあり人の文より志ありたりとあり
又和記の書記のむし事あり二五ハ
和記の事かけぬし事とんるし

ふいと以て細く是れ年早く書とよむ一法の藝を
手書にけりしあしひやも一其書を優ると年長
ても覚えたりく一氣か少くひまはくも一この故智
討より先藝なるものこととてふいおらるふしとて
もつと書とよむ一書とよむ一書とよむ一書とよむ
宝とよむ一書をよむ書とよむと道子くもこのを
前もよむ一書とよむ一書とよむ一書とよむ一書とよむ
とよむ一書とよむ一書とよむ一書とよむ一書とよむ
文字あるれ一藝の理りくくも一書とよむ一書とよむ
や一次り一書とよむ一書とよむ一書とよむ一書とよむ
拳法あるの術ありしとて一書とよむ一書とよむ一書とよむ

文武の藝に未あり本ありは色は人の道とて未あり
まは人の道とてありは色は人の道とて未あり
なふ人と一書とよむ一書とよむ一書とよむ一書とよむ
一書とよむ一書とよむ一書とよむ一書とよむ一書とよむ
事多し一書とよむ一書とよむ一書とよむ一書とよむ
むはの後り一書とよむ一書とよむ一書とよむ一書とよむ
色とて益あり

智ある人の一紙の書とよむ一書とよむ一書とよむ
くも一書とよむ一書とよむ一書とよむ一書とよむ
書とよむ一書とよむ一書とよむ一書とよむ一書とよむ
よ入るとも一書とよむ一書とよむ一書とよむ一書とよむ

崑山人くばあふふとよの得て人の心を
とたふす一は書と徳人の必ふはるるあり
徳色くは由年と又四書五經とより徳を
名くさくづつたる書或より文盲なる所の
ある教をききて道を得て人まらざるを
里て教十年経傳成るる学者をいひ
るは先井蛙の大海をさるるもたへて孔
孟のねえ皆博學を以てさるるを以て
非を志す一聖人の道は廣大精微也今の人の
物料理本たるもの本あるものやたる事
主道理知くくく

詩を修り文をさるるもさるるも人のせられ
さるる好嫌少く久しきもれあるも人の上
下戸の所をこめさるるもさるるもさるる
花もあふばあまはるるもさるるも心も
さるるもはるるもいんとあれはるるも
事も中親孝をいひるるも忠をいひるるも
人倫もさるるも義理をいひるるも
け道と古の聖人のことえんをいひるるも
あつたやされはるるもと嫌やあはるるも
さるるも人となりて忠孝下の人の道を
不孝の子不忠の臣とさるるも天地の
人たるも

あ〜〜と通〜〜とられたとそれぞ我々のほ〜
やま〜と勅あ〜して後とま〜とつら〜と理のあ〜には
づい〜んや他〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
よ〜んや〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
け〜の〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
い〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
新〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
様〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
志〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
情〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

もの〜と和奇の道〜とぬ〜と他のや〜とあ〜と風雅
心〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
集〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
さ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
学〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
和奇の物玉俗の〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
心〜と通〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
ゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
婦〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
女〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
待〜と我國の風俗〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

日一何ぶさぎぬまかひ強くありきく中華のよば
まこ中道一何く一放りいす一中華のよば士居者
しそつ詩のそれの家にゆきてはたたくして中
夏の休むいふまねしきし中華の詩め及まはるの
あつと居まゝ奇にいたるけり唐の詩も和奇
あも及まはるるかくのや一くろ國り軍一かゝる事
と他もハ土直りくふくま吉令の席にまゐる詩賦の
作日本に録らんれいりし和奇の道ゆきりし
けしこくろ國俗りあつこれい奇をふまねる詩を
他もハ本未多くもせつ学多儀かへ詩才あつハ作
りし可也と下も人い我らもあひくくははたれ

を人よりいんてふよりはんと取れし和奇とあつてはと
のよま事足あへ一とたいやり一人まじりし和奇をよみ
て多ういふことあつたけさうまういふことさういふ
にはまえはけり風俗を山くせば好色の標をもびて
人備のまじりにはぬれあつことまじけをぬくす。たま
けりしたるまんされハ今ハ世々うゝをよもも賤くなり
あせどもよまあき人あつたうはがはんとせられあつ
そつ学問のまじりしもたまもまんと和奇の旨をわ
りしえをうけざるいかり人いんくらうまうすしと一し
あつた吉令集以下つら記奇書をそんおあえておりあれ
くま奇とさうまきせんとも我れおり奇を偏信んよりん

拙くして中華に及らば是をうんたよハありきとせざる。
凡詩文とわい文をばきし後に改めしけりあ
より風体と名ひしてするよハ

我が國の俗わ奇を怪をかより志とのばるしを
ぬし詩のそが國俗はあふさればあふらるる他らびり
あそめん我邦を論し新事と志のよはしうてい玉字を
用ひくはりのまじり思ふやうにうまはくしけり必
中夏乃文字と用也し物々書をよみし人しよ
て中夏の文章を讀みしけれけりのをそそ中をとりり
文と傳ふしよと志と名ひしはるるはうわまは
文字のそ記せしけりやう布衣成供連續助字の

法をよむはるるひがる多く文字顛倒して至る
ちがひ文理をあらはに識者の待免うれしし中
夏の人のんく誹笑せんもまづしけり教り字士の必
文章を学ぶよハ是を学ぶの法は六経禮孟と中
し一を中法わくしけりかへる文と名ひして三千篇
をくをそんしよをそえく熟讀せしけり如新されど
のけし文法をけしし文字乃玉のそと志と名ひしはる
とそししぬりいけのわを用ひて作文と学ぶよハ中邦
のそは文海靡柔軟の風とばえん智よへりしは麗飾とす
りし奇巧とこのむは儒者の文とそむらるのそそる

事よりあるを吟せむとほくしてわきを信奇と傳へん
しるはるふはさうてきせしこもはし一佐頼十
杉平一はらあひくる歎を詠むるかよむは留されしと
俊成一折ふ一面白をあらふあふまのの弁とま
しるはらあひくる古詩を吟しるる面白しといふ
そのれと事よのまをみよて人の心の内をえゆるらうりあれ
侍又と他つ物くまらなる心すけつてつてまはる命
書状のしるはるは心を用ゆまらなる色本邦先代
定められし書終の法今まもく廿一これと用ゆ唐の
賢哲の定められし書終はよあつたれし。世俗の眞平
かあひてまてに玉法とありし書終志ぬ人のつて
かとつてまおごて人をしやめ感やまひつて
るはらあひなる二あるを書終とてし書終をまら
わらあなるらうひなくして色不及のあやまら
あつてしはまらぬまらは書の調がらあし人
あひまらるる書終の法たりとまらるる書終に唐上
と志慥はらあひるをまらへしけしつあてらるし
おられる文書くまらるる文字まらるる人し書終をまら
日用のちくねるまらるるしひが事あつてまらるる
しるはる事あつて少くを用ひてこれとまらるる唐の
簡をまらるるまらるる書終の法たりとまらるる書終に
文字まらるるまらるる書終の法たりとまらるる書終に

明や〜又書状の廻と押〜何と申さうか〜の如く
あるはつまじき文はす〜は〜人に見下されん事
は〜れて辯の人す〜られたる〜貌の〜は〜
あ〜あるこそあ〜は〜けし又世にり〜通用の文字
言語の字は物の名は文字は或は〜世にり〜
〜事ゆ〜多〜世間通用の文字と〜
物〜〜経史の文字と〜少〜は〜あ
〜や〜少〜は〜
〜は〜

凡世俗の書状は〜ふ〜の字にひ〜多〜
志又〜字多〜是亦其あや〜と知〜也
あや〜來〜改〜とあり夫と強を改めて
〜は〜

我々の字は〜は〜ぬ人〜は〜
おむ〜〜唐乃文字とこのん〜我
才学ある紙あ〜は〜は〜
〜は〜人の能〜は〜
〜は〜目〜は〜

我々の紙あ〜は〜紙は〜
〜世〜は〜益の事〜は〜
〜は〜は〜は〜
〜は〜は〜は〜

と不仁也是文章よきもの法をあらわしむるなりと傳ふる
文字は少くも所しむるに自負しつゝをさる人の傳ふる
ふもよきものもあらはれしむるにあらはれしむるに
つ國の本は人義智の字とせんは四書六經なるの
書と傳ふるにあらはれしむるにあらはれしむるに
生理なりとあらはれしむるにあらはれしむるに
あらはれしむるにあらはれしむるにあらはれしむるに
らるるなりとあらはれしむるにあらはれしむるに
傳ふるにあらはれしむるにあらはれしむるに
理の字は少くも所しむるにあらはれしむるに
の樂志といふ世にあらはれしむるにあらはれしむるに

用やへしむるの風俗とあらはれしむるにあらはれしむるに
あらはれしむるにあらはれしむるにあらはれしむるに

あらはれしむるにあらはれしむるにあらはれしむるに
やまし連字とあらはれしむるにあらはれしむるに
和文と傳ふるにあらはれしむるにあらはれしむるに
とあらはれしむるにあらはれしむるにあらはれしむるに
傳ふるにあらはれしむるにあらはれしむるにあらはれしむるに
わがやまの詞とあらはれしむるにあらはれしむるに
の世にあらはれしむるにあらはれしむるにあらはれしむるに
原氏なるものあらはれしむるにあらはれしむるに
傳ふるにあらはれしむるにあらはれしむるにあらはれしむるに

わがまんとあつて識者のいふもあなり学藝ある
人乃の事と聞てこそ益ありとれ人平しいせ
てして我をいふも益ありとれ又藤原のふり
かきいふと人の指す世の玉土の名も舊跡と奉たもの
事又と人の家業はるまけりとも學問とてさう
必益ありとれ九人一同の智と求る道也

これり學問とて口舌にふりいふと人わらぬとて
て抑へん情とすべしとれいふとてべし又さうも自
得せぬとあつてとて理深くとてさうもさうも
たふし人め得るべしとて達識の人は非きいふとれ
孔子も昔年ふとていふとてさうもいふとてさうも

世は文學なりとてみとてとて道とてさうも
ありの事とてさうも一文不通の愚婦とてさうも
ばありとてさうも是を以て学なりとてさうも
よとてさうも書道とて人への物後とてさうも
たふとてさうも草書とて近世の各書方の惟まると
此方書とよみてとて書を病むとてさうも
理の学は大地人の大道とてさうも
四書五經以下歴代の聖賢の書は通して
なりとて今これ事はとてひらく通して
かくの如く物と書とてさうも道とてさうも
の書は通して文學はとてさうも大道とてさうも文學

是ハ也神才才智あられとありしハわがハ大なる也
学問藝能拙あけけを拙せしうりと志して天下を對して
わがも我才と志する也是を愚なるも又
○然書とんん句とみくると其理を得く用は用と
ありて益ありし書とて後世の人ハ千万卷の書を
てもよむるも其用ゆるるをよむるも益れず
石をさうして玉珠とて人あり是よく玉珠とれ
室の山をさうして玉珠とて人あり是よく玉珠とれ
されたり書とんん人益ありし書とて其益なきも亦人の
うかむしとて玉珠とて人ありはとたええけしとい
上中下の玉珠とて人あり用なきも亦人の

玉珠と利の下はありけりわがえとて其也是は同音
非上のいねとたええは同音とのけしとて
て同音とて玉珠とて人ありはとたええけしとい
同音とて玉珠とて人ありはとたええけしとい
とて同音とて玉珠とて人ありはとたええけしとい
文字はくひかき。又玉珠とて人ありはとたええけしとい
不学なる人或書とよんで其粗学ある人の言はるの
善悪を評論。又人の徳を評すは又玉珠とて人ありはとたええけしとい
を評論するも其理ありし玉珠とて人ありはとたええけしとい
ありし人の是非を評するも其理ありし玉珠とて人ありはとたええけしとい
の善悪とて人ありはとたええけしとい

なるものありては元來の人の非を以てはば
らまじき事多し又か書を以て自ら進んで
才智を以てし人の一ならずあつてははるかに
知あるが故に

凡そ凡人の習ふは人皆習ふなり人皆習ふは凡そ凡人の習ふは
人と人の習ふは凡そ凡人の習ふは人と人の習ふは

付文章と云ふは凡そ凡人の習ふは人と人の習ふは
と云ふは凡そ凡人の習ふは人と人の習ふは

儒といふ字者の格といふ中邦也世の書生といふ儒者といふ格といふ

いふ儒者の内之性之習ふは凡そ凡人の習ふは
孝悌忠信の道ありては凡そ凡人の習ふは
不学無術の道ありては凡そ凡人の習ふは
如くされは凡そ凡人の習ふは
抄たりは凡そ凡人の習ふは
世異学といふは凡そ凡人の習ふは
古来の道ありては凡そ凡人の習ふは
聖賢の書多しと云ふは凡そ凡人の習ふは
亦如くは凡そ凡人の習ふは
信くは凡そ凡人の習ふは
明ありては凡そ凡人の習ふは

よるこふ折を流くくさの一日あるけきと書
志むく容多られいひと書あしねと書
とらんま切多し一日もいひねひとよめとんを無
いけのいあきかゆめしと書ね徳信を懐いん。
とひよ聖賢のおしえをまのあかりきくかか
きうとよふさるうきうなくむあしくさぬ
志むく一徳仁傑乃名教の内なるああをんを
作人と叫ぶ事とさこのまんやうと書むあり古
籍よ日讀書一日者一日益讀書一卷者一卷益
又曰人乃神志日と海と書と志くたしとく改
陽子ハ至哉天下樂終日在几案といふと書と

て且宋の、大なる益日何のまやと書あ人の学問の
かくのさくいりて大なる事を志しむく
へいり國よけしきて家士のあけ吉野の花んをらん
人をあいつうらん多らんくくも人其まうんせま
あしくと書んめ況人となるそ人の道をよふは吉
今の事いあ物の理よくさ人いひもあなくらん
あさしと書やましくあさるたんと家士吉野に
らあさ中只けいとおいりてよく学ん人といけ
かたし

凡世の中此事のこも我の心はゆるせ難く我信ありぬを
のこも多現るる只信ちの一事のこちのあんとあふ

志はあれははるかにあつたやうにせんといふ
也りれどもおこつてあつたやうにせんといふ
りやとばあつたやうにせんといふ
君父の徳をまつたやうにせんといふ
経をたつたやうにせんといふ
またあつたやうにせんといふ
えはしあつたやうにせんといふ
その漢唐の書もあつたやうにせんといふ
その只の書もあつたやうにせんといふ
知識をたつたやうにせんといふ
またあつたやうにせんといふ

私書は書集を始りて古今集より下はく世の
み多りあつたやうにせんといふ
いしはあつたやうにせんといふ
のりう國のよき書もあつたやうにせんといふ
真由やあつたやうにせんといふ
お納まあつたやうにせんといふ
うのえんたる書もあつたやうにせんといふ
靡るあつたやうにせんといふ
へいあつたやうにせんといふ
字あつたやうにせんといふ
あつたやうにせんといふ

書あるものいふ事と能くするものなるは法あり
朱子の言りては意みたり如影をればは筆の
至妙即字に用能と自らて顛倒の保なく連続
せざる字又俗語をの用しりて本筋古人は字
字の意や顛倒多く連続せざる文字と俗
語とを用する様多し泔風體軟媚なり奇巧
とこの人下りや巧をこのめは法控りて古人れい
ちしむ也

凡日本の人古より經書とて記を辨し符又
と能く皆粗りやある精密の文字なり是字の中華
に及るざるありて其たる作者教の字の皆拙
ちりけきばむ奇而又れまやしやありてよ記り
んて神一気まありて妙なりて他又も傍り

暇ある所の唐の古記法帖は餘て字すも皆是閑中の書
のしん上上の清玩なりと評すも其乃一日用り益
何の字あれは古人のよ記もを學ぶべしやま俗
なりてへくは古畫をみるも亦めりて一國の今
ある文字もいれりて今にまると唐の書
法を叶ひて賤しりて中華の人も亦のさる凡古人
のあせる文章法教書畫のよとてて道と極する
とるる一しんをいれりて其の理とよの物す
一しんをいれりて皆物のさるりありてこれを法に

況中夏此唐虞夏殷周秦漢晋唐宋元のいつの
時や久し五帝三王は何物と云ふと云ふはくはか
なくして年月と云ふは留貴人のいつの形もなきはくは
地物の理と云ふは留貴人の勢もなき人とはあやま
らぬと云ふは仁と云ふは憐と云ふは智と云ふは人の若
くは老と云ふはむねと云ふは一生とすはむねのいさむと
目くは生草木と云ふは子らと云ふは人として生れし
たぐしと云ふは何の由りか人々のわくあはくは家
も神も幸も人々の形も一も一は後た人とは
又よと云ふは久しと云ふはあまはくはあはくは人とは
又よと云ふは久しと云ふはあまはくはあはくは人とは

いふたうと云ふは神武天皇の御時より今に
廿二と云ふは久しと云ふはあまはくはあはくは人とは
長生の樂と云ふは久しと云ふはあまはくはあはくは人とは
人の事と云ふは久しと云ふはあまはくはあはくは人とは
かたきと云ふは久しと云ふはあまはくはあはくは人とは
神と云ふは久しと云ふはあまはくはあはくは人とは
是胡氏
をむねと云ふは久しと云ふはあまはくはあはくは人とは
唐の王柳菴と云ふは久しと云ふはあまはくはあはくは人とは
きつと云ふは久しと云ふはあまはくはあはくは人とは

たのしみとあるを新音を頼りて國の詞ありはるや
るふいさる事ありは古音を吟してこそは修をたぐ
さむへ一は又の歌に楽すのうまといと去るの御道
古詩三百篇を能吟玩してつら心を喜ぶあり詩の教の
道とよみへ一詩の教は温厚和平なり心を内よ
やくしてありはるはるはる風雅の道詩の本をあら
後の詩もは風雅の神なり一と物巧に一物さ
りやうある文を傳へて人よあるれんとまらり行
の本意ありはるはる詩と傳へて人学れしはつわ
志むとらありしむ物もめてありて志を去る
るくの如くやうて詩を傳へは益なく害ありてを用

徒と之風雅の道とありあり一詩を傳へて又用
なく学あき人よ詩を傳へて人よ國の人
唐の韻語は正を伝へて國の士宣りしは
貧賤か人見のしよくせよ人て古の道とよみ
の事には通をばるるふありはるはる一何ぞ貧
少とくはるはるはるはるはるはるはるはるはる
文章和音のせえはるはるはるはるはるはるはる
よし事とひらきし事とひらきし事とひらきし
又故の人よはるはるはるはるはるはるはるはる
そおつはるはるはるはるはるはるはるはるはる
とひらきし事とひらきし事とひらきし事とひらきし

ひろむるもそれと人よき

○日本の人昔今佛と多うして佛と念し佛經と見え
て成佛せん事と実の好む人多し世に聖人の書
古きものと聖人の書をよむるものと好む人あり古
今に多しと云れども聖人の道は實をよむること
つらみのひく事と云ふこと聖人はあらん好むる
人一人あり成佛と教ふ人なきは是れなり
かくくのやむなりや學問目もなり
凡事と化と文の世に傳りのおもひも大事なり
後代の院とありはしんてみ
はあすしんは世にありしなり

なりきし一若くもあひししを巧し飾を巧はまれの
事記を香油し物多し一実記すしし益なきの
事記を文にむしりししは後の書となす事
實たるべし如くして實記をへししと如く多
く此の不用の教員言ありて簡要ありし人益れ
るなりししし人なり故文章は名あり人の他
まむる事記をよむるなりししあり實記あり
て不用のものはなく言約ありししし理明なりし
文のうけしし精巧なりしししししししししし
その中しししし多し文はしししししししししし

事なひやれ侍る益なき事と仰りて我々の飾
 ゑりきあつらひ悪あやわれ人々の爲なきこと
 害ゆり人のぞれとあやまりて何と云わし
 とよしをていつらそ我らは事天道のせものま
 くしおそえしねえゆるるはつきてを天道
 めしむらわまはあまの苗のせの目よしく初はつと
 れしひのれしきくすなりく天道をいおそへし又
 此後いづくあやしきまを明く必後やの
 少やりのしんとく物うき獲り人ともそそき
 けふかをわいしとあつらふ人になくわ
 いしとそめまたかる人になくわ
 人ぞそしるこしうをとり人をとそし
 のありあつたれそいすあいらしよせ
 としあひしてつらふ方をあつたそ玉の
 けつ思ひてつたてていふつていふ

唐の聖人のつたの語をあつてひて教を
 道のつらふはるあつていふつていふ
 ちしよは事とあつたつた事とあつた
 道をつたあつたつていふつていふ
 むるをいふこの語のつたのつたの内
 新なまれたり玉風なつたは墨色
 抄氏俗男女のつたつた村厘のつた

多し道理をなす。情なまればされしことい教
志はふ悪く。民俗のいひきり。皆人情を
て理あり。是を人言すはまき人の心を感せしめ
善は移り悪を戒む。物とあれり。和奇は又如の
や。故へ和奇をよくしめん人必賢人君子なり。情
されしと内よ人情をよくしけり。多し多し是
亦其奇に感して善心をたす。情をのむれば物
たれり。この意は和奇おほくわく。ゆづり。唐の情
乃教と同一く。善はうつる。益多かるべし。されし和奇は
と好色の奇多し。是の情をいふ。鄭清の風なれ
教とあらん。之の風をみちひく。妹とありぬ。

何しとをいふ。まの事へし。とりはわれし。うれし。君子の
人言す。ある人。と。直し。人。と。ま。れ。は。何し。ま
ふ。は。物。と。る。人。も。お。ほ。く。情。三。百。篇。の。聖。人。の。意。を
ひ。定。め。玉。り。和。奇。は。明。哲。此。人。の。り。く。よ。は。何し。ま
を。あ。り。と。の。人。の。皆。教。と。た。く。されし。今し。の。志。是。の。和。奇
と。人。の。人。無。理。を。わ。り。あ。り。と。教。と。た。く。和。奇。と。よ。く
あ。り。ひ。用。ひ。は。益。た。り。あ。り。と。世。の。和。奇。も
只。初。を。よ。く。し。て。う。た。れ。る。と。の。ま。た。志。を。と。る。は。は。く
れ。し。和。奇。の。志。を。い。は。す。家。を。す。し。と。い。は。は。く
古。を。用。ひ。し。や。あ。り。と。は。以。て。し。す。し。と。と。察。せ。よ
せんと。されし。和。奇。は。本。意。を。し。と。わ。り。と。和。奇。

をばくするもふもふとてはくも吉人の奇ふもいひ目いふつ
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

学問なるの道理を人々には其人の微見未だ其の
或学力弱老人を對し其の高く深き事とて其の
物学なり。人々或聰明あるは其の學術わく又敬
固く志く教ふく其の人は其の深き事とて
あは我徒とて其の位をばくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
其の事もせれく道り志あるは人々あはれく
なく物も情あるく其の理とてくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

道なる事やあり財多く勢ありく苦をばくく
ちくくあれくくくくくくくくくくくくくくくくく
道も好む人々あはれくくくくくくくくくくくく
せれくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ばくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

古く学文好む人財禄の事あるく多し財ありては
くく田畑はくくくくくくくくくくくくくくくく
残すは或人負願もくくくくくくくくくくくく
めく書もくくくくくくくくくくくくくくくく
書はくくくくくくくくくくくくくくくくく
少くくくくくくくくくくくくくくくくく

不書と有りても人わらうは艱苦と云ふて書
と續く人多く書きて忘者や勿くは艱苦
あかれむかくのあくは難くしては人の
功業と成く道成る世に用ひらるるなり
日乃本も近き世も都に松竹の書あくは
少とわゆ師なく軍卒ふたたくてり先か
祈く他國もをく師とて手書成り求
ねと日下はまてよらんあひ書を写しと
て艱苦を今も家貧く人い書を
とこのあひも書なく師なく
く書と續へてやとて明窓淨心なく
けいふとてむらうふに回る他の
か一斗り書と有りて備者なり
くも人今とめ人女子に衣とあ
飛ぶくしと書と有りて財多き
書と來ぬとく明窓淨心なり
きめとて石屋たりと又賢父
いすもあんとせし師ありとて
書と有りてとてはれとて日と
るるもあつて無頼の愚あま
空言とむと博奕と淫樂と好
て学問とむと道義とて

けいふとてむらうふに回る他の
か一斗り書と有りて備者なり
くも人今とめ人女子に衣とあ
飛ぶくしと書と有りて財多き
書と來ぬとく明窓淨心なり
きめとて石屋たりと又賢父
いすもあんとせし師ありとて
書と有りてとてはれとて日と
るるもあつて無頼の愚あま
空言とむと博奕と淫樂と好
て学問とむと道義とて

ありて身終る我ら身の書と云ふを以て用ひたまふ
 昔唐張憲武といひ人土乃可惜説
 と有りて昔今身しき人の書と後を好むる
 今の人が好む師あればと云ふは事と好むる
 ちあしむる事と云ふは事と云ふは事

我ら國の書は詩人多く、唐の歴史は書と記され
 りし我ら玉の日本紀以下の國史まらしく又律令格式
 と云ふは唐以下の教書と云ふは唐以下玉の書
 歷代の事、本朝の典教は云々し我ら通じ和
 漢の文と云ふは我ら國の事と云ふは唐の事と云ふは
 我ら玉の事を指す事と云ふは唐の事と云ふは玉の

いあやまきん

我ら日本上古の言ハ元より 風物下りて中臣校の詞の
 やく又款の事と云ふは似て今の俗の俚語と云ふは
 てい中 如く云ふは神功皇后新姓と云ふは
 云々しこのく他の國と我ら國と云ふは文り通じ
 漢字は傳はる事と云ふは太子以下聖經と云ふは
 云々後漢字の音ハ玉の人の口はけりしと云ふは
 云々字の相通と云ふは五音を相く多くて別と云ふは
 云々漢音或改めたりしと云ふは今漢字の音是也
 云々と云ふは文字ハ中華の字ハけりし音と云ふは唐音は
 和音もあれしと云ふは五音相通と云ふは道ありと云ふは

又佛書傳りて來り是を稱する者多し是より後
に上代の和漢語を履くべくす佛書の運傳者
も亦その以俗語をする者多し又佛書に傳るは
も漢字を以て其の傳りて佛の出るは俗語多し
佛書の佛書より早くしてしてしてして人多し
さうしてそのやこれと用ひて俗語を多くして
世俗の俗語と漢字を以て相するて和漢語を以て
語の字をつてぬる者多し又文理字を以ては
多し且文字義の多しは多し且世の俗語は
又よりく佛の文理を以てその事多し唐の俗語
たよと後世の事多し況や其の國文字乃

抄きと平

凡世俗の事多し其習つておるは昔よりわやも
てしに打つて改めたる事多し本朝の
官職は名にその古の古制ありて其の
多し其文章を以て我々の昔朝廷の法制
とてし其本朝の官名を用ふも我國の規模なる
も亦其異を好む書生は其國の古制の官名を以
て用ひしは其唐の語を以て其友名を以て用ひ
其もその事ありて其強て其名を用ひて其和漢
合する者多し其玉の名も陽の字を以て其河陽丹
陽播陽莊陽は其陽を以て其又別名は其多し

伏見を伏陽と云華人多く其地を以て陽と云ふ
長清と漢陽と稱する如く一凡唐と漢陽の
字地乃名とする山の南河北り河の東に在り
陽と稱する所謂漢陽漢陽丹陽の如く也其地
たも多きを以て陽の字を升り事 業林の
流りけりまうて其後を師名儒と云ふ
と云ふ多つて皆因循と云 習而不察と云

書地漢の六十年の後より一の歳の市の人母のひもんぬ我
の如く少くも一の聖賢なるもの如く其地を以て
わたりて教と云ふ如く一其理をくく大なる事天
の如く少くも一の聖賢なるもの如く其地を以て

事 天と海との如く一多きを以て其地を以て
漢 亦是の如く一其地を以て其地を以て天下
幸なりと云ふ人多く日本に居る如く其地を以て
と云ふ人多く日本に居る如く其地を以て其地を以て
はくわたりて其地を以て其地を以て其地を以て
と云ふ人多く日本に居る如く其地を以て其地を以て
人間人の好むる如く其地を以て其地を以て其地を以て
はくわたりて其地を以て其地を以て其地を以て
其地の類は多し其地を以て其地を以て其地を以て

吉人尚友す。乐群ハレ。未ハレんをハレる。業ハレをハレ修ハレふ。故ハレ人ハレをハレ交ハレす。

あらわし

我の書ゆべきことかしく徳を大に身に養ふに於て字よりて其
徳を感ずべきとされし。凡人の徳を養ふに於て字は其を
奉るに最も其の功をなす。之を以て字の功に云ふ。
尤も長壽なる人に至る書に於て最も其の功をなす。
人の字に於て最も其の功をなす。字は其の功に云ふ。
得は其の針と云ふ。至る事と云ふ。其の功に云ふ。
其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。
其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。
其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。

の後此事あり。若きは此の如く。其の功に云ふ。其の功に云ふ。
ゆると勸む。其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。
事。幸を以て云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。

^ク巫祝の書クニシテも衆を秘し。其の功に云ふ。其の功に云ふ。
よくその字を以て此漢字の如く。此の功に云ふ。其の功に云ふ。
人等の世に於て。其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。
度より。其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。
と云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。

字同し。其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。
る。其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。
人。其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。其の功に云ふ。

魚鱗や形々……
の事ハあり……
あり……

我が国の本と神武天皇より……
二千餘年……唐ハ堯舜より……
年……
人の所……
歴史通鑑等の書……
考へ……
ら……
の……

千年中夏の二千五百年の歴史を採る……
豈止……

和漢の人古今書……
神……
ら……
之用の書……
全書……
の……
不の制……
書……

ナニヤノヘシラ

たゞ一因一果といふ言へく道徳性命を後世に傳
用の字なきを

小学の書は多し朱子本注は去へり此は徳行の道を
去るに何ぞや陳選の句讀王雲鳳の章句可なり
されど句讀は小学に本旨ありむるは事後
王雲鳳の章句に於ては王僧後出のもの巧み
たり近年ハあり句讀と世に於ては月日陳選
の語は賢儒ありしをわやするは是に非ざる
立教の初り朱子中庸の首を引用されしと
聖人教を多するの弊を云ふべしめんたりと云ふは
只其の字義を後く説くは小学のこのはらう

此より句讀は中庸の章句をりのみならず事
説くも原をきりむるも原たる事と云ふは其
初学の童子に宣ふ如くは例よりみりて字を
多しを餘も陳選の句讀は如くは事多し
凡小学ハ小兒の学ハ亦なりしを教淺進み
志をく易に問ふは行をせしむるに
日本ハ中世以後正史たり師史をすれりて詳な
らばは故天下の大事は正史に記しある文不
あはし師史もむかひあるは事後
らば実習するあり況や國を治事するは其
志を其あるべきは後年ハ他方より其の何

未後意とあるなり

いと後り人後りたり月有りて御作と稱して心を出し
志むるもよ一家業いと後る地人乃心を今一の工は
あき御前を多くはく益あり

天地の道人倫の教の物も理教千年の人数千年の事
海土も天地の中今人物極りあき廣大の理廣大の事
志の少書とよりん字同き力を以て空ありよく急を
一歩大なる系豈ははめて少少の字の字は是らんや
是を以てんれと書成りて人にも書るありし
不章なり少と多のくせし人のあり後なりしと
湯桶文字のこゝれ和似文字のよとよと好ま音と訓と

よわちやく物の名もはとよりし記はくを湯の訓なり
桶と音なり訓と音とを合とてゆけりん法をく
かくのときあやまりて名つきしもの多し
書とよはは味をくしとありよみくるのこころを
や自得しかくよくとるふむあをくしんを理と
へしりしを難とく多くむさふん又くは益
る

書成りてははやく主要とすははやく廣くし
もあきよははやくしれせきと義理の廣大なり
ばされし義理詳るし難せはやく要約と失ふ事
あきとくし名と多し名ありしははやく只二目あり

み廣うゝやそれい鳥くくらしきるや〜 學以廣くふされ
む要と云ひてあり〜

君子と名つをさけり行もや君の位に指てり氏と子の如く
いつらむゆふ名はくは是孝經正義の記なり又聖人
或は賢人とも若人とも君子といふは位あり〜
至徳所れなり少人とい行も身自は白晝の欲ふ志を以
て心志の大體を考つる若を以て是孟子の三言を出し
位は法きて〜も下にあり細氏と少人〜云
書生は其誠多くある〜道徳を志し以て文
士は詩文と唱へ〜て多〜少他〜も〜
用る〜を學問するの非なりかくの〜なる

用る此人と學者と相ひしき〜 經史の學の實用の
了却は〜 實用の學と同〜 意得〜 是は
さるは、吾等の人も不知なり
を海〜 温雅〜 精巧なる事
唐詩の如〜 婦人の傳本と〜 亦〜 玉字の文
貫く〜 傳言なり 傳言は亦精巧なり
ワ玉の傳〜 大平は古き〜
日國のあり〜 故なり 玉乃系は
つ〜 國俗よりあるわ齊と
傳〜 日本の人傳を〜 唐言を學ぶ
朱子曰如孝弟忠信人論日用事播為樂章使

人歌之倣周禮讀法徧示鄉村聚落亦可代
今粉壁所書條禁篤信謂今世一人多玉字
といふ系と作古雅なり諷誦一也如りめ
孝弟忠信人論日用の事といひ是にまよひ
古人の嘉言善行をいへる物なり一人教
誨教せしめば世教の神功ありちりらん今俗の
物の中は遊童の淫歌あつてもあれども詞
意多くて曲節も急迫なり元と眩り情を乱
乱るは是れなり又樂の風を移俗と易人として
再感一也或は化より此果るをてて音歌章
とにらくやまんとていふべし

昔相雜記曰張存賢作詩自教言兼遺子孫雖
詞語質朴而事理切當足為規戒本邦平
時和歌二百首と仰りて規戒とて楚河親當と
亦和歌二百首と仰りて箴諫とて珍重とて人
皆學識多記故もて詞鄙俚なりて其意も亦不
ある者すこれ世教又志わ一人古歌なりと我
可なる者或はあつひ或は別は如奇と仰りて知輝
の古事と曠といふ人よき所なりと述ぐらん
古乃歴史通鑑なり或通とてあつて天下の廣き
古今の久しき事ありてくんと胸中より
なるもの人のあつて或考へる今來此鑑とて

是聖經を多しけり我記をひらく考へて是又
たの益あるも又古来の事とひらく事も大なる樂
なり

近世の学者の理学を執持し今世の付宜を以て
は日本の風俗を以てしむるも此古禮を用持り
今の世よりいへば是を以てしむる事なり
後世の儒者未見識ありてみこころは佛を以て
人を重んぶといひたりたりと云ふ事あるべき事なり
たあへき事なりなりなり人々重んぶの害あり
益あり深く戒むべし只の事とわたりて人を
重んぶるべし是を以てしむる佛を以てしむる事なり

るを以てしむる事なり
仁義の道の難るるも我の仁義の發用ありて我
事同しなり此道にたり又仁に發たり我
の我の發るるなり人々重んぶるの及ぶ事
わがされは我を以てしむる事あり我
人を戒め流賊にあらざる事あり
學問の思ふを以てしむる事あり
の事なり一書に百六十事と云ふ事あり
而して是を以てしむる事あり
程子の父大中と云ふ人を以てしむる事あり
かゝる事あり只我独りて之を以てしむる事あり

あるは法とまへ——今の人の作せる詩を
人よんまのりとしこのむいりうすむるをさし
む——

詩歌多く作せしと字句の益あり——詩をよみ作ら
んとしむらう——の言葉せられし世をまぢくの
やくせをさし枝子みとし——よき詩を作らむ
いんやけむをけり詩をや抄するむしはる果
人唐詩を能くしとけしとありす——志とのこ
ろ——我の玉の風土を人かきとけし和音と作ら
し——とまなつむとあられば詩の能くし其和音を能
くし是風俗土宜まけしして——

詩と文章と能くし奇怪の文字と好むと詩俗なる詞
と用るとけしと志へ——是等の法は今時の人詩を
と能くしめつ——奇——は文字をこのむ武又し年
々俗語を用ゆ二たうと不可と奇異なるる文詞とな
し或は巧とさる身風俗のありし習ふ文法と中
易ありし年——うとさる城ありしとさ
葉少^{セウ}温^{オン}う白^{ハク}と文章世の教まりつとさるれは巧るれが
もさるる——古今の文章世の教まりつとさるは色
なりとさるは今と能くし人と世散の節とある文
と能くし——
新^{シン}と山^{サン}う文章軌範と文章の學に取あり文章を

學つて先儒修孟子を讀讀一次に又季札紀
と或則とす一近年末世の賤き文とせんか
本邦の和奇と和又と修又と修く一和奇和又
いものら一の修文と修く一國の修文と
清大と修く一國の修文と修く一國の修文と
土宜よりあるは修く一國の修文と修く一國の修文と
理と述へん一和又と修く一國の修文と修く一國の修文と

日修本とり一溫和慈愛の國なる故に和奇と
溫雅なり一情修一其と精一巧なる事唐
の詩と和修く一和又と修く一國の修文と修く一國の修文と
學者と修く一和又と修く一國の修文と修く一國の修文と

る一と修く一國の修文と修く一國の修文と修く一國の修文と
我が國も修く一和又と修く一國の修文と修く一國の修文と
ありと修く一和又と修く一國の修文と修く一國の修文と
唐の文と修く一和又と修く一國の修文と修く一國の修文と
事一と修く一和又と修く一國の修文と修く一國の修文と
小學の書れ文義と修く一和又と修く一國の修文と修く一國の修文と
と修く一和又と修く一國の修文と修く一國の修文と
通と修く一和又と修く一國の修文と修く一國の修文と
の修く一和又と修く一國の修文と修く一國の修文と
初學の人朝に修く一和又と修く一國の修文と修く一國の修文と
畫ハ史漢の書法と修く一和又と修く一國の修文と修く一國の修文と

少多しは帖とて一版後より一版面版となく
園圃とありまゝの版下有道^{ドウ}空^{エラ}とて精練
と節暢とて一晩飯の後六行を射と條の武
蘇とておろし一夜と又経傳とてらん或經史子
集の要語とてらん唐詩を編一和奇とてむ一
故事十は落とてらんみらんよ一一夜臥まのらん
一日の伴れ言行と點検とてわやまうすくらん
いふ安くいぬ一毎日新書とて

書讀らん書とてらん一書よあたらと一或經とらん
史とてらん一書とてらん一亦一冊の書を教
多らん一歩一あるはこれに書かれて委らん

工夫のれて精熟せしめて功とあり

冊子とてらん一之は讀書の要語と抄写とて時々記補

とて一要語とてらんゆき一功と用事とてあつて
も七益多とて一故に要用とてまは必記補とて
記補とてらん用とてらん

史書の朱子の綱目とてらん一熟讀とてらん

古今とてらん一ゆき義理と通とてらん七益多とてらん
六經四書は法とてらん一古く廣く通とてらん此とてらん
加ゆる義理とてらん益あり

白樂天詩とてらん心をくわゆる一むら忠とてらん
詩麻卷のよらん一わらん一とてらん一の言と

なりしをきくも樂天と又け病をまぬらす凡
侍を傳へ人の此おんをうりあへりしを平
御りしを海にひきかへりしを

文訓早

武訓

武の本末ありし忠孝義勇の兵法の中武徳也節制を謀
略の兵法也節制を人教とせむる兵とけり道先いへり
軍法也弓矢鉞戟等れ兵器の術の兵法の末也武藝なり
本末ありしをがらけりし武藝の兵法を本とし兵法は
仁義を本としけりしのをわらふと志してそを節とけりし
そを節とけりしをがらけりしをがらけりしをがらけりし
理乃武徳とせむし武藝を志らむる人も忠孝義
理の骨われは戦功を武名とせむし武名を志らむる人も
忠義なり戦功を武名とせむし武名を志らむる人も
くくく君子の本とせむし武名を志らむる人も是之武名

曰くは学よくして事つべしと云ふは必ず徳を本と
てつとめよと云ふ事一将を布衣ありと云ふ事一又忠義
と剛勇ありと云ふ事あり程子曰人心有仁義之心而後
有仁義之氣に我の心本あり剛勇に仁の氣也末也仁
義乃心われが勇氣をのぼるも出る也仁義なりと
云ふ勇を修め大人にれをたし少人の盜賊となる

凡武士となる者九孝の義理の志ありては武勇あり
に節義剛く在公此道くも又武士は忠義を
兵術武藝を志すは武具と云ふは軍用令と云ふ
いふといふにけくも武勇の法とあはるるなり
武士の道内は忠孝理を以てて兵法と云ふなり

武藝を志すは武備と云ふは武具と云ふは軍用令と云ふ
寸武士と云ふは忠孝義理の道を志すは兵法武藝
はと云ふ武備ありんば武士の業を失ふと云ふ
武藝の匹夫の勇の事と云ふは位下也と云ふ
学あり大人に武藝ありと云ふは用ありと云ふ
藝はあづめの道なりは武備ありと云ふは定め
平生に事奉の時をを用ひしを分限と云ふ
人る武具あり人の兵器なる具金銀米穀等し
くもては武具の籍と云ふは不足なく用意
せしめし武陣の時をすては武具の制法と云ふ
は武具の用をすしなくは武具の用をすし

武士一人は事、福則^{ふくとく}立くと是なり何なりとて
 用意ありくといは誠の所なりまづこれなり
 武士一人は武藝を志しんば何なりは馬
 刀劍流長力を流^{なが}拳法^{けんぽう}なりといは流を志しんば
 志とて戦いの事なり切となりてし中なはおと
 ら馬とを志しんば一は馬の二は文と志しんば
 とい力強しと志しんば一は文の術行いしを他の武
 藝にさくおひては世にせよとて一は一生の事一
 方と志しんば用は立はば事なりといは馬に流世
 ては日用の事なりといは流はる口と志し物ある
 といは流はる

士志を人に多くは然る馬と戦の法と志するは
 武藝と志するはこれに敵を志し敵を對し
 志す大將志する人に志す兵法と志するは
 武藝と志するはこれに武藝志す者あるは武
 藝に志するはこれ大將と志するは武藝に志する
 兵法に志するは有司と兵法と志するは志す
 志するは未だ志するは志すの士に武藝と志するは
 志すといふ事なりといは流はる長力板^い力^り勢^{せい}海^{かい}
 流は梅水練なりと志するは志すといふ事なり
 志すこれに志す志すといは流はる志すといふ事なり
 一藝と志するはこれに志すといふ事なり

化蘇の道一かこ一かよ一蘇一書一なるべし
志をこししもの一士の子弟たる一蘇といふ
と多てん魚ふもの一蘇を考ふし一かこ一
学あつしこれ人の師たるはをれし一か
の人若き多く蘇の一人一蘇といふ
かこ一蘇一一人の師たる一

軍器三千六ありらを上首子武蘇十八射
と弟一しは是兵隊も人し一中華の書なり
日本も一し^射とまん一て武士をとりと一
華一て武蘇の射ををし一日本も
もら馬と武蘇の宗子大日陰の孫を射

射を人し一りは多し一人多し一らるあ
ふれ一りのもら射馬一騎るも一志
多し武蘇も内ありらるも一

唐は武蘇十八事あり日本は武蘇の教多し
射騎と先し一大将も一カ術術と
亦志一し一外一^抜切の法カと一し一法眉
尖口の法一又^棒棒と一法一法一法一
志一^ハ皆用と一^款款と一又^捕捕^縛縛の法一^決決
り^決決^年年一^元元^寶寶と一中華人^事化^てけ^士
も死まはせ^世世^法法を^あひ^し一

法中華にありの事と後ふまじく人足と以て例と
はしめたりつくり出さる

兵隊のいそぐ士族志は少く法は日回用也入りしき
若葉ありては市中に指くゆきしむらひあれて
ゆきふもさうある若葉は花陰花力として中
右りとさき少く花やうもさうさき法もやうして敵
よりつるをさきせざる瘧の用なり三よの年軍
とこえさうかよひた人思ふ好んで大言をいして
術をいひあてこと多くよ人の実なるはさうさき
あふと面白く瞻がりの人いふさきさきさきさき
勇怯は勇にけああたりに怯をつたさきさき怯

久ねく病なる法云勇怯は生れけらる性より又さ
らにさきよむま色けとあひいさきさきさきさき
勇は怯もたさ武士の子ハ武藝を學び武
勇なる人いふさきさきさき物後さきさきむらさきの
記とよん勇とさきさき武とさきさき武士
の子ハ商人とあれはさきさきさきさきさきさきさき
さき勇さきさきさきさきさきさきさきさきさき
さきさきさきさき天性さきさき習慣の自然のさき
と聖人のさきさきさき知財さきさき初めさきさき天性生れ
けらるさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

農人の用ゆきし高人の武士の用いし高人の
と習考利とはうけて武士をけしなり農人の
こと他のおたく一節あるは士道

生きたるは勇気あり、勇は血気の勇、勇は義理の勇
あり、血気の勇は強きを破り、義理の勇
すられしは、義理の勇は、義理の勇は、
節と考らば、義理の勇は、義理の勇は、
義と守りて大節の、義理の勇は、
の、多し、大節の、義理の勇は、
西は、義理の勇は、義理の勇は、
を引ても、義理の勇は、義理の勇は、

を起すけの、勇は、義理の勇は、
きけく、勇は、義理の勇は、
この、勇は、義理の勇は、

将を名、勇は、義理の勇は、
勇ありて、義理の勇は、
志、勇は、義理の勇は、
也、勇は、義理の勇は、
を、勇は、義理の勇は、
吉人の、勇は、義理の勇は、
也、勇は、義理の勇は、

軍之つとむる所の古の軍法は以國を治る君將は
其を用たる士を多くいれつと其を用乃武士多け
まは士に取れるものあれば財福をたはして國を
りく信氏國空新を故に平生生用多死武士の多
くは古はまは農人の内勇氣あはんとそのをえかんで
少の福とあはて技者も多へー農人の高きもあ
ても志しやうくは古はまは農人の高きもあ
れのもんで其勇氣をこけまへてはまは平生
乃技者もあはてまはまは農人の高きもあ
く志をたはすか一の費なり一二年なる所の耕作
てえつとまはまは多く福とあはてされども飢をた

平治乃所の四時乃ひまはは精なり軍法をまは
平をんで軍法はありて兵法なり

金鼓よくはる大鼓なり是陣のまんで士卒の耳と
まはまはなり旌旗はまはのあり也士卒の目と
まはまはの軍にのまはまは進むも退くもな
一柱なり一勇者也獨進まは信然も獨退く
三軍力を同じまはれはまは軍力はよくして敵を
やま

士はる者我をまんで身をまはつるもの如くは血氣
の旁に盜賊もまはまはまはの只身をまはつる
まはまはまはまはまはまはまはまはまはまは

と煙んす又母よりけり身と流はまゝは不孝あり
死ぬへくして死ぬるは是を死をなれ人命を拘り
て君の爲ふせら不忠あり是亦子太白く言たり年
若く血氣はくんたり人勇とこのまのちか若の道誠志を
生死只我よりふかし一も宿あけき忠孝の道をまじり
死ぬへくして死ぬるは死ぬへくして死ぬる
死ぬるは死ぬへくして死ぬるは死ぬへくして死ぬる
事いぢかり武士と學問とて我理と我死と
まづ理よりあふ

兵衛、ねとまじり武術の位よりて大小の用とありて
位り切なる事と先まあへて一将と多人にあふ

もは士卒の長とあり若く兵術とありこれの良制
も意もくもく一も上の人兵術とあり一兵術
と武藝の布く兵術とあり一馬劔戦乃武藝
との学ふと武学とあり一申候まて末とあり
一将とあり人兵術とあり一武武藝乃武藝
武学もあつる武藝のまを好て本とあり一武
物をわくゆえに志誠喪たふ乃教也武藝は人又
教もあつる也兵法のまも教もあつる也
甲冑の着やう旗指物の制はるよそて刀を抜き流を
まじり教もあつる命もあつる時敵もあつる武に敵もあつるの法は
匹夫の勇れもあつるも力劔及る武藝もあつるの業もあつる

戰場ありてはいつの時も愛せぬ者も術も士も人習
 いはるる一々も其術を教ゆの師あり書りあり
 張南軒曰君子不避難亦不矜於能是は亦
 のうれしき記録のそとては揚とてつて身を乃とて
 不愆なり義は功は是能とほりさるる能はあはれ
 とてけて身をのりては又我身あわつては
 思ひし如合て能あつては思ひし二の思ひ
 ありし如勇にありてはされは身を立し
 されはすてはわけて理あはれするは道
 理もむとて死ぬまはさし死はわけては
 つると思ありとて死ぬはさし死はわけては不

義とて故に死ぬへうは死にけり死にて身を失ふは死ぬ
 へうあり死にては義を失ふは死ぬへうあり死にては理は
 日本は兵術を学んで又学ばるる道は仁義を
 今教ゆるは日本の武通は儒者のとて仁義を
 乃道を用ひては偽を行はされは偽利を以て
 志といふは又曰夫兵六功を以てありては魏の
 曹操のといはる日本もては利を以ては人の仁義
 にもむとて人の國はうてはこれをもて武の
 也もるるの徳者孔明のといはる日本の楠正成の
 志は義ありては功を以てはありては是武將
 の本意ありては兵六詭道なり其の勢なり

てい神の身方は射くくしりくして表裏を以て
人の功をうまひ或國をえりて送りてふも
兵術と物とくく一害あり是日本の武道之原の
道を以て日本の武道に比して日本武道あれ
しむらう一此武道よりてふれりる風俗を以て
功を成くくもして日本の風俗は何えはひ品
よくすくくして人のありて功を成くくもひ
てけり勇とすなり日本乃武道也なるもくく秘
密にして人は抑くくもして人を治すなり石智
あれは是非を以ててはしむるもくく思ひた
の時も兵術の候はれりしりてりたりるひ利と

はを以てて其多し兵技する人多くは是に倣え
てあきぬくく事ハ辯はるふくもくく又辯くく
人よりてんもいづるくくはれと天下乃氏ハ
皆我が同胞あれは我が見方の良きを迷る人のありき方
まきあるくくいりてあくくむくくもくくしては
はんにむけふ仁をうくくあひてたをけあれわわ平
あきもそれ思なきく知くくひくく書のよるんを
道をきくくくくはれりるあふくく天地のやを
くくくく道なきくくはれりる道者の道なき
は二れくくくくはれりる儒者乃道なき二道なり
唐の武道日本の武道なきくく二れりるや古なる

今の及是又らるるに易曰天の道とまきく陰陽
といひ人の道とまきく仁と義と不陰陽たりといふは
天の及はれを仁義の道所の天の陰陽たりや仁
の陽徳なり義の陰徳なり仁義の所別する人の道す
べきものあり易の聖人たるは人の教を万世の境に信じて
うきくくは兵術も亦仁義の道の内の一事也人を
以て人とすれは仁と義とを以て仁たり武を以て教
とすら乱とすらむの義と又武の二にまきく車の
輪れとくちの支翼せとく一うけとく牙とくおの國
天下を治めとく仁義の道の本を以て終たり又武と
仁義を以て用たり用とく多とく火とくおとくおの

水とく物とくまはるるや故に仁義の道の内は文
武たりとくむの介に法法たり兵術あり教を以て
計謀と用とく多とく人の徳と攻んとく人を徳と教と
の及くかくの及く事はの及く對する尚りて教とす
る權徳を以てあるはさしと有らんまはるる兵
術者の教の及く仁義の道とまきく文武の法は骨
子君臣朋友あり人倫は對し徳を以てあり
人の功名とくまはるる物と利を以て以て日本乃
武道とくはさしとまはるる乃道なりといふは
と名つても盗賊とく利欲を以て義理とまきく
は是國を以て乱とすらむは亂とすらむ武の道は

上を犯し乱とせし乱臣賊子の志とせし日本は武通
を以て盗賊の志とせし同く乱臣賊子の志とせし
海に心ありん人となし非ざるべし詳に辯せし
にこれに義の道に在りしを以てしありは是は信
なり信ありきハ如くもや海に古も今も人道た
多に人となしされハ武通に非ざるべし將と人
信ありきハ士卒の心誠にして義を慕ふ
今も人を欺きしつらうを以てし士卒を以て
きうらんハ百歩の歩ありとも義の道に在りし
くも一故に兵乃道に義を奉り信を以て
人の心誠服するあり孫子の權謀を考へてし

將の道ハ智信仁勇嚴也といふ善將なる人仁
義忠信を以ててありこれなくはけりく義を
以てしてはとあり只が身を利せん士卒
皆是よりんおひ伴して恥あるは何ぞ戦ふのそと
信を以てし君の爲め義を以てし人命を以てし死
する者ありや是を日本の武道といふべし事
辯せし

人中より我を以てしありは是は善將なる人仁
義忠信を以てし君の爲め義を以てし人命を以てし死
する者ありや是を日本の武道といふべし事
辯せし

く不そそそれをあふぐり後日又それをまづきむ
へきうしひを思ひて人なり此西よも終きてとらむし
人中はく思口するもの二層もなやういふへくは
及理をさきうさるし道理は服せしむ夢をまけま
志てとらむしけ方すし思口するしはなむらにを
と重たく人をあふぐりて思口するものおらふし
後のつぎまひを思ひんづしは必腹痛なるし
あまきこれあるれば方よりけりくともむしに必因
はくめものなりされしけ方すし人をお
せりて思口すへくし思口すればいりある程痛
も又いりてをねりてきりしひなるありあり

とぬくしひくそそ我も又自教せしむあふぐり
一程乃いりしひくそそ身とすうれてそ親し及不
不孝不智の節りものなり武勇あゆむ大死と
へ君父のく死を孝とけりあふぐり身とのく
人に対してはつるいしおむし彼悪人の合
せあふむしされいこと世にけりそそ大いしむ
少人の福と易にも入るし凡朋友の交ひも
みれとあつくるやまふしやけられし年し
わらひしむしれしむる剛備あふぐりんを
はる事甲陽軍鑑より内及修徳を
む也

小治政 徳にひきり 紳とは是れおひたり
云々 死ぬる事いやはし 死して道理
多し 死ぬる事いやはし 死して道理
死ぬる死よあはるる死はさる也 若死ぬる
死して死ぬる死はさる 故あり 是れ大死也
勇士の命をさるる事 如くは 捨てる 道は尚
る 紳 道はす 死するは 大死なり
多し 相見ある若の死は 死にたる死をめでに
備して 一死の死をりて 人と闘ひて 身とさる 是
身をさるるん 是れ 武は 死ぬ
て 死するは 命と相 心 勇ありたり

義の非中 徳にひきり 紳とは是れおひたり
是れ不忠之君父の死は 命をさるる 是れ 勇は
立命をさるる 身とさる 命をさるる 是れ 勇は
了れ人君人の命をさるる 命をさるる 是れ 勇は
勇はあはるる人の死をさるる 是れ 勇は
是れ 勇はあはるる人の死をさるる 是れ 勇は
は死するは 命と相 心 勇ありたり
生れ 命をさるる 是れ 勇は
唐の風俗 昔より 君をさるる 命をさるる 是れ 勇は
是れ 勇はあはるる人の死をさるる 是れ 勇は
是れ 勇はあはるる人の死をさるる 是れ 勇は

又學ありて法乃道と志れりたりは唐の長
きる西なる之——日本の武士の志より——我邦より
君の爲をさくひん死して命をたへはざる人々
きいあるもやは國の人の天性武勇つよくこそ
昔より國の風俗より名をたへんむせはたり
是れ和漢の人の各長きる奴あり士氣あり
死をたへれざる事あり和漢同し——されども志
才ありはまじり玉のあり——さて又文字を好く
武を尚ぶの道は夫た久し——故より日本は世界
の内よりすくられたる我國と云へ——只中夏より
比するは又學を志せしむるのみ

故の官將は只勇猛計畧のこまにみあふあり
文武兼用ひ寛極相用ひに志ありて小過を
ゆるし——舊惡とつとれ法をよく聽用ひく
こまにみあふも財をたへまじりて切をたへず
故に士卒は和同してよくこそ切をたへり
忠臣義士の身をたへてく死にせよの志は死に
はしき財福をすく朋友のこまを切らばこそ
うはちあふりて弱ありける戦士三死と云
又氣節と云はるる君子のなりたり一朝のいり
に人となりて身をたへるは士氣ありて
容る氣と云はる氣と云ふは小人のなり

勇をこのむ其の中を中とゆはるは四氣を守つて子の三勇あり
士氣也中よりこれに客氣たりともし氣ありは士氣
にあつては是少人の勇なり四氣ありは事と成然
を客氣に心事致志をんさるもの也
外は勇何れに足て内につれき人何れ何れ
いつてあく俄の多に何ひて臆してさる事あり
ゆゑ人ありを定めて後勇い下るものなり
是氣ありていつて足る外思ふ人にて内明
なる人何れ何れありて内なる人何れ何れ
生れけりいさく七何れとさる事ありて
以て人といふやまらる事あり

呂氏春秋曰之國之至必自驕必自智必輕物とい
るは國國は長のこいも亦かくのや一信せ云い
武勇は古今にまらざる事ありて教をこし給ふも
多くいふ義あり何れは兵ありていつていつて
て士氣ありていつていつていつていつていつて
智ありていつていつていつていつていつていつて
ふせき給ひていつていつていつていつていつていつて
物をうつていつていつていつていつていつていつて
用心ありていつていつていつていつていつていつて
少解ありていつていつていつていつていつていつて
いひていつていつていつていつていつていつていつて

弒せられたるは理はあはれるが人の王は必ず後世に
國語とてさす書は三時の農をつとめ二時の武とさ
らふといふべきに四時法はくろく農人のまき及秋
時一回圃とつとめてけらるる農は冬一回作
おもるる閑りけり陣あり山陣ありとて特とて
軍陣の法を學ぶは是二時と武をあらふ也古に
討つ武のしるは成るをわらふ農のまき耕夏はくろく
秋一回富は山をまき殺をわらふおもはは二時のひま
成りてつとふは人の治世はと武と
つとれは農は陣ありと武とあらふ後世に
乱世はわらされは武の學ひあり一揮ら馬劍戦

と傳ふ學をくまに術を志すべし武藝あるは志すん
いあらくは御れよく是をおもひ武の學をくまは
事のつとめて軍を起し成るひきりいさみとてく
勤むれば義行りれてわやまうたて後悔ありや
おもひのいさひのまにをとおこころいさひはは
まはるる義とありおられたるは後悔されしと
か一是を義とせんてせらるるは勇あまき也
兵を司ふ人は將も有司も兵法を志すは法と
武藝を志すはあはるる軍の道を志すは武藝と
ら稱つらるる進め退きけり命令とて是帝制なり
是と正兵と又智謀を用ひて敵とてく軍事と

やう是を指揮と云ふ奇兵ありは此の兵法之是存
有司の必するべきなり又陣法の中より奇正あり楊
柳條のこゝを奇兵と云ふは所あり

五倫の對して我の心界と云ふ共通の界とされ
心ゆゑまゝにあつてありて道行も是或合音子と
取ねるゝと以人倫のたれりも是はたは直
ちるふ兵乃道哉りのをみておそれるゝ兵よと
志く敵を備る難多と云ふらんもや若く日我
とれされば敵よりつま一なる言將に我ざるは
きよおそれて敵の兵れ多すと強弱をわんて身
方の強弱と老く知る兵の道哉たれ人兵具兵糧と

と之は月と評定し敵よりつて計をまりのほく言
理なくして出陣し戦ふのそんでいおそればとんて
計を出し士卒の心を二つて敵をたてまやう是
敵を勝のたにおもくを以て守りたれ孔子は兵法を
いふのめく三軍と云ふは暴虎馮河のおそれざる
いふときいひ後ひ事を勝るおそれ律と好くあさ
ん人々與し後らんやと告ぐめよとつれも軍法
いふ事におもくを以て守りて人々思ふとけつて
るめ用心をまをしく勇氣ありて臆病をばる非
武は本末あり知仁勇れ徳は本也武徳ありけし武
の道立はらるる刀漢の類のそいひ難たり未るあり

武藝をけまゝに教へ被ひしこと又忠仁勇の三
徳、大將士卒皆多つたこと知れしことと用
ひしに任ずれば士卒も志すことありの忠孝を以
て義理りしこと教を以てけて武と母も人の
とれし利欲もさうしく乱をたすことして善とある事
なければ仁義忠孝のまじりて教をうらやましく
すふことありしことおぼえ知仁の道に勇あけまゝに
まじり世に若く武の徳あれたことけねば武の徳
も又馬刀槍乃藝と云ふことこれいはずと戦
りて教はつ事しことおぼえ武の徳用ふこと
士卒と武藝と云ふことあることいひ但た好む藝

に也とのこといふ事を本とすこと末とすこと
義貞軍記曰昔我助成時宗親の教とありし事後
世これと学へしこと若成人の後かくのこころ
とていひし事横死しし事あるは永く本意とす
こといふ家の村たえしこと親の教とありしこと
徳とすことしこといふ事押寄して御願を決ま
しこと教をあらはれし事命を授けし事ありしこと
篤信僧は仇近世の儒又是とすことしこと老あり我
思ふこといふ事乃離阿も若く本意とすこといふ
ことし事法も保つ事しこといふ事御願を以て
教のちこといふ事士卒の多き事いひ我といふこと

老るやとも必用に地あり 係とこのんて事とあり
とげんとして居子の年元ありぬ教と我々の強弱と
はくは只即時は押よせざるも一かも年未のそとに
志をばくくば年を油とげきくく人のおとしいき
たると聖人十五路と戒めて暴虎馮河く死して
悔ありん若く我々をせ 必事にはそんておそれ
係と好んてある人のことこのそんて 伍子胥の父兄の
仇と報せくく身を合くと呉王のつくと呉國の力を
かりたりあり伍子胥も教身方の勢とほくくは
志く押よせて父兄の仇を報せんくせとたたる本
意とつらんや張良く韓の仇を報せくくも言はれ勢

成るやとも 夫亦此是とば云ありけりくくも討つりく
打とけんははくくもたつりくくもくく上道祐徳の家當
帝位多くく用ひたりも祐成時宗軍身より帝時
り押あつたりばなまり教と打とけは是くも只大死とくも
せのされぬ我負軍記の傳と世のせん者される會同
せ 況さくは理りくありくくもわたりえたりはくく
昔我記の帝はたつり 昔事と詳る傳せり
小宗大不法くあり 是理の尚たれり天よとくく
乃之時の勢地ありて大よとくくあり智者のも多あり
小宗大よとくくありはれ我ありしは時勢とくく
是をてと國がと身と成るるあり教身方おるくめ

是教も勝の道也と云う

士となる者平生の温厚を平うして物を押へ色を去け
をすへいして人を出し人を去すべしと云う
常々志^{こころ}成るも志と名を以て義理といふべし
愛を以て平生の志成りて勇剛と名を以て
多量の事をもせんしと云うは道と名を以て
いふは勇氣と名を以て強毅を成るべし
是れもいふは死すのせんては物と名を以て
理を以て平生の勇氣成りて人といふは義理と

性別強なる人といは志を執ちやまはぬ
と常々義と名を以ていふは志といふも
士の子もつらに死すべしと勇を志るは
志を以て志と名を以ていふは志といふも
弱人なれば分るべしと勇に以て名を以て
志と名を以ていふは志と名を以ていふは
志と名を以ていふは志と名を以ていふは
志と名を以ていふは志と名を以ていふは

勇者の節ありては荀子の能定つて後能定す
といふもあらずと云うは教もいふべし

前之上兵と戦ふるまじと傳ふるに於ては
とほりて戦ふるも軍の能斗り事あり
故に之將に教ふも身方多く多く殺す事
の曰わくは事一之世は色の子孫は
天道に石仁をゆくことあらむゆへに
天宗の人の皆天の子あるに
とありて後よ故人を殺す事
孫多ゆきとなり仁若し將となりて人
殺さばあつたむ事殺代るあり
ゆへにや石仁の人を多く
世より去りて一代將とありて
孫絶え

人古今に例多し天道不仁をゆくは
是を以てとるに理あり
天道とあるを明かす

漢高祖の父太公と項羽屠まはるは高祖の求め切
りたる故項羽つわな太公をくも明の英宗を
秋のつけりり殺す事天子直宗はの部毛と杯也
か父をりれとあり後世に後帝位ありて
ももふる人太皇帝と稱す宮北狄り父と
乞も子父とありれとありし事何れもあげ
あつた北は英宗とありて益ある事北屠つ
た英宗をわくことせり是言は直宗の心と

却く猶をくむのうしあり弱敵のハ注をたざる
勝をせばおられとて事あり
一時の口論ありて國澤をなすに必ありしひのりお
このあつとひ人の過言を礼とてめを慥忠せる
なりあつとひのりしひたてし敵たし又もあらあ
人な戦ふるよの言ふよのあつとひのりしひを
あつとひをたれたるべし

神功皇后の御所とせのまのひのり 時の軍令日本紀は
出あり唐の言の軍令をいし海をうてあつとひ
挑戦とて事ありのりん多戦令を戦りんとす。にまの勇士を
さつとひて敵とてしひのりを本邦より迎吉を臣

秀吉の軍回御衆と戦りんとて先近江の御嶽に陣せ
られしに友陣よりあつとひのり多戦かて戦りも秀吉
の勇士七人先つけし敵を退けしつとひのりす。と戦
挑戦とてし

武士と物の敵とて事神功天皇の御時言麻志麻治令
と道徳令とて事兵と具とて由表とて事道徳令の
司とて軍兵とて事とてしつとひのり麻志治令は司とて物
部とてしつとひのり

戦陳とて事勝とて何色にせんてのり又おと向ひの敵が
あつとひのりしひをたてしつとひのりあつとひのり
わつとひのりしひをたれ牙方より越さる所ありた

わけて馬より飛こまんと馬あわさむ移て馬との
るの只ととやめを勢ひひそひ飛こますへ一也とて
ま一と故ゆりも同急なり

教川を越来。をゆく戦ふ吉はけり。中流をせり
ふは流る。教川をせり。後。車系と云ふ。事。は。河
ら。身方。の。川。を。せり。二三所。を。引。退。ひ。て。陣。を
志。教。の。川。を。せり。車。の。次。う。の。教。兵。は。存。り。あ。る。と
任。ま。さ。く。定。ま。ら。し。む。に。中。の。り。り。の。流。る。時。に
方。り。き。こ。ひ。う。せ。て。教。の。後。る。き。を。急。う。う。て
教。と。川。も。遊。む。め。う。つ。と。ま。は。必。利。の。深。なり
大將の旗を立ゆも美夏は將のたまた立秋をいねのたまた

立是陰陽もまじりて勢なり

使番に教陳をうくひたねの心を身方の士卒も後
を後なり軍の道と志ねるなりなりと知仁
勇あ。功若と用ひて。士卒とまはけり。士卒とま
とめ士卒とまら。士卒の心をねるなり。大將も
を使番の志もまねるなり。必一人を急ぐなり。自
除の有月より。と職なり

古人の出陣と喪の礼と以是をけり。軍は余り。目。は。士
皆。た。り。て。後。を。流。り。て。母。兄。弟。は。つ。ら。ま。ん。事。を。り。め
め。た。り。戦。を。た。り。も。心。死。の。道。る。れ。が。か。く。の。ま。り。ま
事。む。べ。な。り。ま。り

此の如き先ず進むと勇と一引くは海軍の如きと勇と
先ず進むは先ずわくは引くは海軍の如きと勇と
いふは

凡た物として兵隊用と戦とを道の義と術とを勇とを
乃四を分るべし一は義を質とす一は戦をおこすは義
くも義をくくは軍法術の兵強くは教
うつ事一必をかりうつは教を術とす一戦をせす
いふ義あり戦をねとす一は義を質とす一は戦をおこすは義
況は戦をたるとは必術あり一術と陳を術と
うとくはその法なり一戦の術をたるとは必術あり
うとくはその法なり一戦の術をたるとは必術あり

死生存亡のつらき術と志と一術あり一
戦へて必敗るは戦とあり一は勇あり一は勇あり一は
教を敗り力なくは戦あり一又知以成へ一知るは
始終軍の道成就をいふは兵のたつ知と以て始と終と
終とたつは凡そ君子の兵を用ふはははの若しをんは
何れも

五兵乃内義兵外兵の君子の用ふなり一
の三は君子の用ふなり一市人の用ふなり
范文正公の同将の事なり今この事なり一匹夫の勇かりしは將
いひらくは同将の事なり今この事なり一匹夫の勇かりしは將
をきくはへり一はそれ匹夫の事なり

兵戎用ひ軍を執るは仁義よりつては之なり是文武を用
ふ也若文武よりつては兵戎用ひ盗賊とす事
をまぬれしむ一凡兵を用ふ天地の物を生ずる仁
心をむく聖人のみむるもはむく一兵戎用ひは
是天道強はひまふなり聖人の兵は之を義を以て仁
を中にしてなり程子蝎の頌を教く則善仁放く則傷義
是聖人の兵戎用ひの心なり

二季保二次下頁五五頁

武訓 年



I have

I am

I will

I will

I will

I will

I will

I will

I will

I will

